

(別添2)

No.	7
策定年月	令和3年4月
見直し年月	-

麦・大豆産地生産性向上計画 鶴岡市産地 (作成主体:鶴岡市)

1. 麦・大豆の生産性向上・生産強化に向けた方針

鶴岡市は、経営耕地面積に対する水田の割合が約9割を占める国内有数の穀倉地帯である。
近年、主食用米の国内需要が減少する中で、農業所得を確保するには、非主食用米及び園芸作物等の生産拡大を図るとともに、食料自給率の向上に向け、大豆の生産を拡大する必要がある。
大豆の生産性向上にあたっては、低コスト生産に向けた作業の効率化や隣接ほ場からの浸透水による湿害軽減を図るため団地化を推進するとともに連作障害の解消に向けた輪作の取組みを進める。
また、近年のゲリラ豪雨や長雨などの影響により単収の低下が見られることから、排水対策の取組みを強化することにより、単収の増加と安定した収量の確保を実現する。
現在、鶴岡市においては、水田フル活用ビジョンにより大豆の作業の効率化や団地化の推進の取組みを行っているが、本計画において、大豆の生産性向上・生産拡大に係る取組をより具体化するとともに関係者の連携を強化し、農業の更なる活性化を図っていく。

2. 麦・大豆生産の現状と課題

(1) 需要に応じた生産の現状と課題

大豆については、「エンレイ」(5割)「里のほほえみ」(3割)「リュウホウ」(2割)を中心に約1,900t(令和元年産)が生産され、豆腐・豆乳や納豆原料向けに全国に販売されている。また、一部では契約栽培による「あやこがね」の生産もされている。需要には応じられている現状ではあるが、地域によっては作期分散が図られず、刈取時期が集中し、適期刈取りが難しくなっているという課題がある。

(2) 生産における現状と課題

近年、大豆の作付面積は減少傾向で推移している。単収については長期的には増加傾向となっているため、生産量も長期的には増加傾向となっている。しかし、ゲリラ豪雨や長雨などにより年次差が大きくなっている。連作圃場への作付けや排水不良は単収が低下する原因として考えられ、更なる収量向上のためには大豆と水稻のローテーションによる栽培や排水対策の実施が必要となる。また、平均単収の大幅な増加のためには、適切な肥培管理や雑草対策、センチウ対策の実施を徹底することが必要となる。さらに、近年は、農地の集約が進み、1農家あたりの経営面積が拡大しており、作業効率を図るために団地化等の推進が必要だが、団地化率は横ばいとなっている。